

季節を詠む、
時流を詠む

四季の歌

美野里短歌クラブ

大雪に閉じ込められし人びとの春への思い如何許りかな
珈琲の香り漂うこの朝もすずめが庭で餌を啄む
わが庭の片隅に咲く福寿草霜おりた朝春を告げおり
寒々と冬の一日を蓮田掘る胸まで浸り泥にまみれて
寒き夜恋猫の声響きおり車過ぎ行き戻る静けさ

小川短歌会

それなりの短歌を詠んで八十路なり歌歴は長くとも上達はなし
やすらぎはうすくれないのねむの花山道ひとりいやされ歩む
花粉とぶ季節くるたび禿山に杉苗植えし昭和期の頭つ
また七日寿命のびたと初物のくさ餅食す夫のひと言
ぶり返す腰の痛みは報いかと思いに至れりあのことならん

玉里短歌会

生寿司を食みつつ昔を思い出す一汁一菜おしんこうの味
半世紀夫と暮らしし河原子の海鳴り今も耳に聞こゆる
マスク取り祝辞をうける新入社員希望に満ちて頬赤く染む
もの言わぬ石の仏は雨の中肩をよせあい笑顔をたたふ
昼下がりに緑さやかな菜花摘むほろにがき味は春のよろこび

寄稿 (中央高校芸術部)

新緑のきれいな緑が目に入り心落ちつけ夏を待つ
五月雨に悩む私を見つめるのは窓に映るほんとの私



助 德	石 高 松 正 鶴	幡 中 石 佐 根	白 破 宇 菱 菱	白 破 宇 菱 菱
川 永	橋 田 田 木 町	谷 根 田 藤 本	根 谷 宮 沼 沼	根 谷 宮 沼 沼
佳 一	吉 久 通 敦 文	啓 良 は 正 智 恵	清 香 和 子 江 子	清 香 和 子 江 子
穂 葉	生 子 喜 子 男	子 子 江 正 子	香 子 子 子	香 子 子 子

みづうみ俳句会

芋の芽のいでて余生の力なり
桜舞う公園めぐり吟行す
花冷えの窓に貼り出す新クラス
柏原水面に浮かぶ花筏
朝刊を読みつくす日の春炬燵

みのり俳句会

梅の香の置かれてありし古希の膳
山笑ふ一斉雲を寄せつけず
紅梅の力ためたる蕾かな
福袋買ひたし気持元気無し
崖の蝶ふはりふはりと子規の句碑

櫻の会

花筏即かず離れず五十年
夕桜ことにひとりの厨事
朝刊の皺に包まる花菜買ふ
車座の盲導犬に花吹雪
鉄砲にならぬ土筆の目指す空

くるみ俳句会

大樺広げる枝の若葉かな
しっとり田畑湿らす春の雨
雨降りて艶の深まる若葉かな
背を反らし見上ぐる枝垂れ桜かな
花に酔ふみちのくひとり古寺かな

たまり俳句会

草の芽や荒れたる庭の動きだす
戦時下のウクライナにも春の草
朝日中土手の草刈る山羊の餌
甘党の父の忌日や草団子
花冷えや姉の訃報に空仰ぐ

小美玉川柳会

ホームラン打って兜の緒をしめて
畑からもらう元気で種をまく
おせっかいもなくなり近所遠くなる
船旅が似合う夫婦が老いている
「頑張るぞ」わしも甘辛二刀流

江 橋 小 枝 石	長 野 鶴 ま 齊	小 大 安 松 堀	木 村 矢 岡 網	塚 立 白 島 佐	長 長 長 三 榎
戸 本 林 川 井	谷 川 口 町 め 藤	原 根 彦 崎 内	村 田 口 島 代	田 原 澤 草 藤	島 島 島 本
忠 昇 岳 白 昭	光 初 文 す 富	エ 昭 淑 づ み	小 妙 富 禮 奈	文 千 清 香 心	久 美 昭 子
男 丘 悠 水 夫	男 江 男 け 子	ミ 宣 子 子	夜 子 子 子	江 代 香 子	子 子 子 子